

令和6年 3月1日	農作物病害虫発生予報 3月	山口県病害虫防除所
--------------	--------------------------------	-----------

～目 次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病害虫】	2
	【その他の病害虫】	9
III	参考(予報の見方、気象予報)	10

I 予報の概要

作物名	病害虫名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
タマネギ	べと病	多	多	多
	白色疫病	やや多	やや多	多
イチゴ	灰色かび病	多	やや多	少
	うどんこ病	平年並	平年並	少
	アブラムシ類	多	多	多
	ハダニ類	やや少	やや少	前年並
	アザミウマ類	やや多	平年並	少

お問い合わせ先
山口県農林総合技術センター(山口県病害虫防除所)
TEL (0835)28-1211 (代)
FAX (0835)38-4115
E-mail a172011@pref.yamaguchi.lg.jp

II 予報

【主要病害虫】

タマネギ

1 ベと病

令和6年2月29日付け令和5年度農作物病害虫発生予察注意報第6号参照

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/122/22328.html>

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	発生前または発病初期

(2) 予報の根拠

ア 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%(平年3.6%)、発病株率0%(平年0.4%)、また、1a当たり調査では、越年り病株の発生ほ場率17.9%(平年6.8%)、発病株数0.5(平年1.5)で平年に比べ多かった(+)。

イ 気象予報では、3月の気温は平年並か高い、降水量はほぼ平年並(+)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

ア 越年り病株は、4月頃まで発生するため、こまめにほ場を見回り、早期発見に努める。

また、越年り病株を見つけた場合は、直ちに抜き取り、ほ場外に持ち出すとともに、ビニール袋等に密閉するか土中に埋める等適正に処分する。

イ ほ場の排水を良好にする。

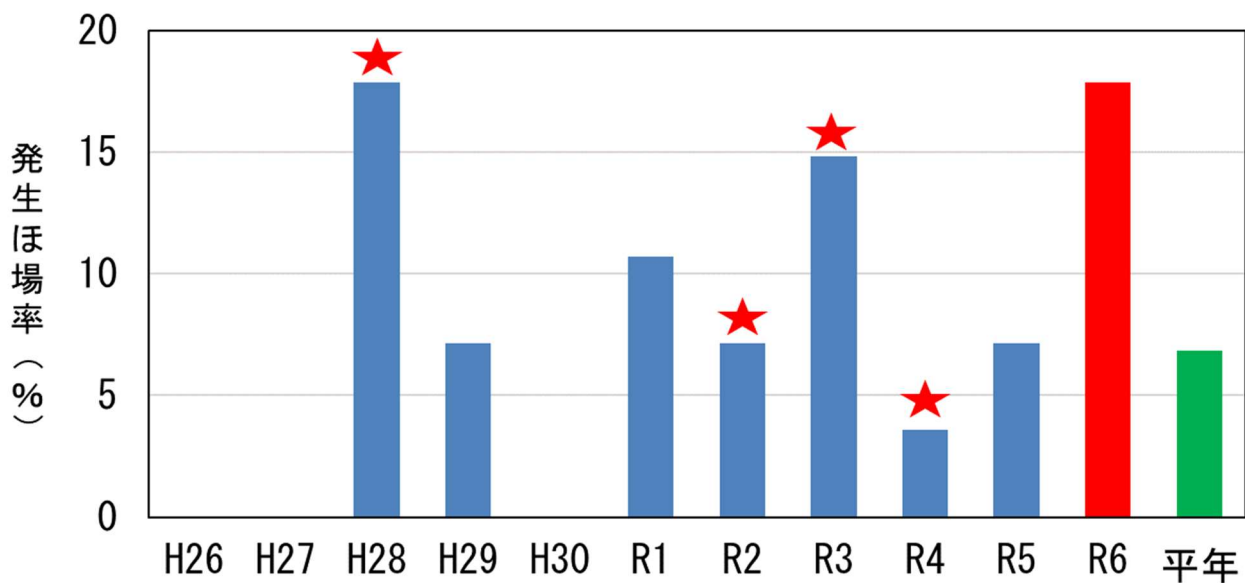
<防除のポイント>

ア マンゼブ剤(殺菌剤コードM03)、フルアジナム剤(殺菌剤コード29)等の保護殺菌剤で、定期的な予防防除を実施する。

イ 越年り病株、二次感染株が認められた場合は、直ちに治療効果のある薬剤(殺菌剤コード4, 11, 40等)で防除を行う。

ウ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

※ 本病に登録のある薬剤は混合剤が多いことから、同一成分の使用回数を超えないよう、必ず成分、殺菌剤コード及び散布記録等を確認してから使用する。



タマネギべと病の越年り病株発生ほ場率 (2月下旬)

図中の★印は、タマネギべと病の多発年で、いずれも注意報を発令した年

2 白色疫病

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	発病初期

(2) 予報の根拠

ア 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率3.6%(平年3.9%)、発病株率0.3%(平年0.8%)、また、1a当たり調査では、発生ほ場率3.6%(平年6.8%)、発病株数1.8(平年8.3)で平年に比べやや多かった(+)。

イ 気象予報では、3月の降水量はほぼ平年並(±)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

ほ場の排水を良好にする。

<防除のポイント>

ア ほ場の見回りを行い、発生を確認した場合は、治療効果がある薬剤(殺菌剤コード4、40及び43を含む薬剤)で直ちに防除を行う。

イ 薬剤散布後は防除効果を確認し、その後も発生が認められる場合は、系統の異なる薬剤で追加防除を行う。

イチゴ

1 灰色かび病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	やや多	少	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率25.0%(平年14.9)、発病株率3.7%(平年1.2%)、発病果率0.6%(平年0.4%)で平年に比べやや多かった(+)。

イ 気象予報では、3月の気温は平年並か高い、降水量はほぼ平年並(+)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

ア 多湿条件で発病が助長されるため、換気等により施設内が多湿にならないよう努める。

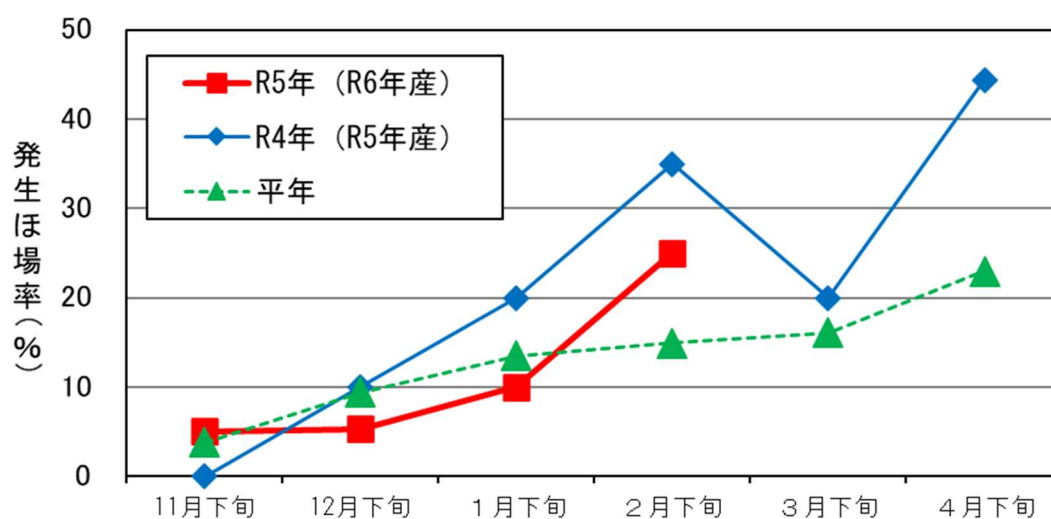
イ 被害果等は伝染源となるので、早期に取り除き、ビニール袋等に密封してほ場外に持ち出し、焼却や土中に埋めるなど適正に処分する。

ウ 窒素過多による軟弱、過繁茂な生育が発生を助長するため、適正な施肥管理に努める

<防除のポイント>

ア SDHI剤(アフェット剤)、QoI剤(アミスター剤)、ポリオキシシン剤およびジカルボキシイミド剤(スミレックス剤、ロブラール剤)は耐性菌が出現しているため、薬剤散布後に防除効果が劣る場合は他の薬剤を使用する。

イ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。



イチゴ灰色かび病の発生推移

2 うどんこ病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	発病前または発病初期

(2) 予報の根拠

2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率10.0%(平年10.0%)、発病株率0.7%(平年1.1%)、発病葉率0.0%(平年0.3%)、発病果率0.1%(平年0.1%)で平年並みであった(±)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

被害果や被害葉は伝染源となるので、施設外に持ち出し適正に処分する。

<防除のポイント>

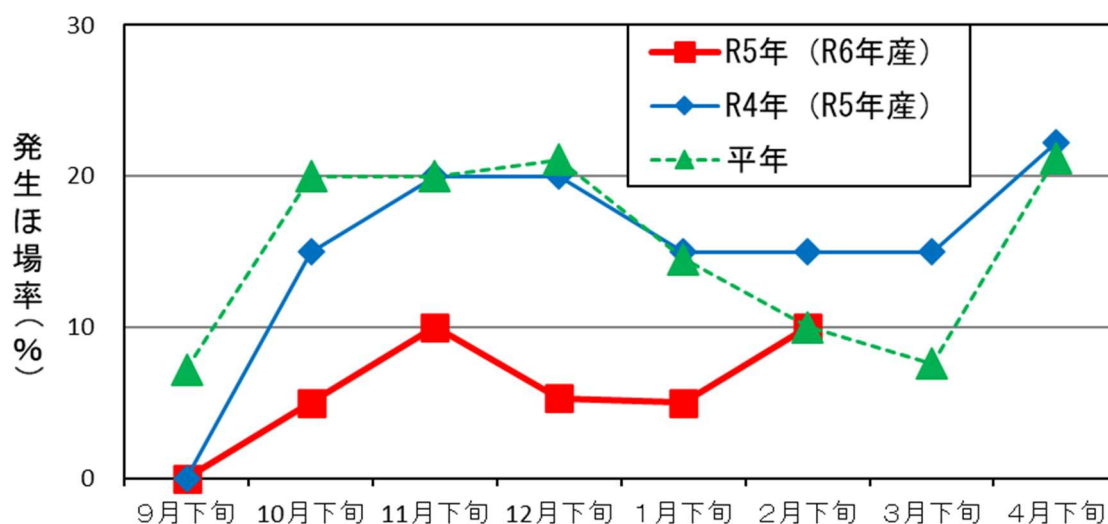
ア 本病は、発病初期には葉裏に発生しやすいため、葉裏をよく確認し、早期発見に努める。

イ 予防防除と発病初期の防除に重点をおき、薬液が葉裏や新芽にも十分かかるよう、古葉を除去して丁寧に散布する。

ウ DMI剤(トリフミン剤)、QoI剤(アミスター剤)は耐性菌が出現しているため、必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は他の薬剤を使用する。

エ 薬剤散布後は防除効果を確認し、その後も発生が認められる場合は、約7日おきに1~2回薬剤を追加散布する。

オ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。



イチゴうどんこ病の発生推移

3 アブラムシ類

令和6年2月1日付け令和5年度農作物病虫害発生予察技術資料第2号参照

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/171123.pdf>

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率40.0%(平年13.5%)、寄生株率7.6%(平年1.1%)で平年に比べ多かった(+)。

イ 気象予報では、3月の気温は平年並か高い(+)

(3) 防除対策

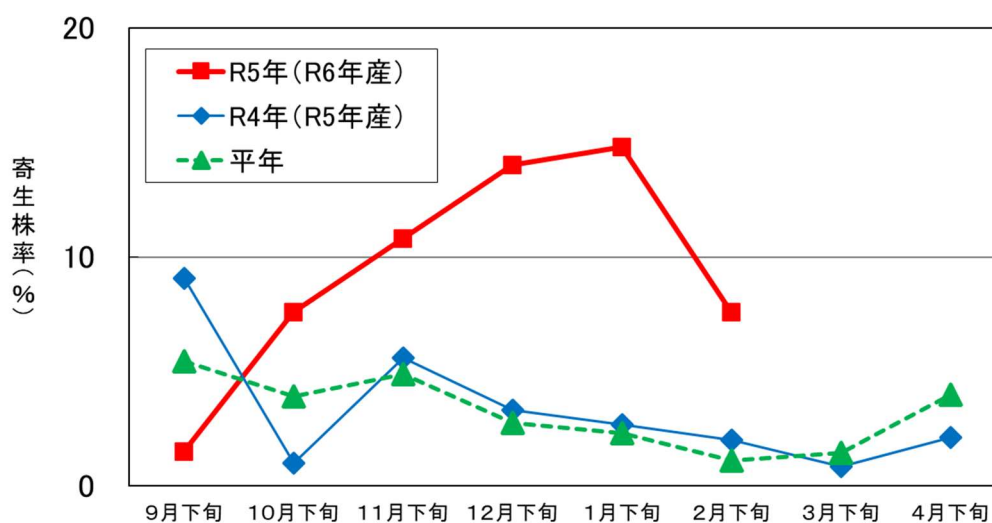
<防除のポイント>

ア 薬剤散布時は、葉裏までムラなくかかるよう十分な量の薬液を散布する。

イ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ウ 薬剤散布を行う場合は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。

(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/123673.pdf>)



イチゴ アブラムシ類の発生推移

4 ハダニ類

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	前年並	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率30.0%(平年44.0%)、寄生株率4.4%(平年14.9%)で平年に比べやや少なかった(-)。

イ 気象予報では、3月の気温は平年並か高い(+)。

(3) 防除対策

<防除判断>

ア ハダニ類は体長が0.5mm程度と小さく、優占種であるナミハダニは体色が薄緑色で確認しにくいいため、ルーペを使用して葉裏を確認する必要がある。

イ 摘除した下葉10枚程度を白い紙袋に入れ、室内に1日おくと翌日にはハダニは新鮮な葉を求めて移動し、紙袋の上部に集まるため容易に観察できる。

ウ ハダニ類は部分的に発生することがあるので、ほ場全体をよく観察し、発生を認めたら直ちに防除を行う。

<防除のポイント>

ア 薬剤防除の前には、薬剤が葉裏まで十分かかるように下葉を除去する。また、除去した下葉は、ほ場外に持ち出し適正に処分する。

イ 気門封鎖剤を使用する場合は、その多くがハダニ類の卵には効果が低く、残効性がないため、7~10日間隔で散布する。

ウ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。化学農薬に対する抵抗性が発達しているため、散布後に効果を確認し、十分な効果が認められない場合は、気門封鎖剤を中心に防除を行う。

エ 天敵(ミヤコカブリダニ等)を放飼している場合は次のことに注意して使用する。

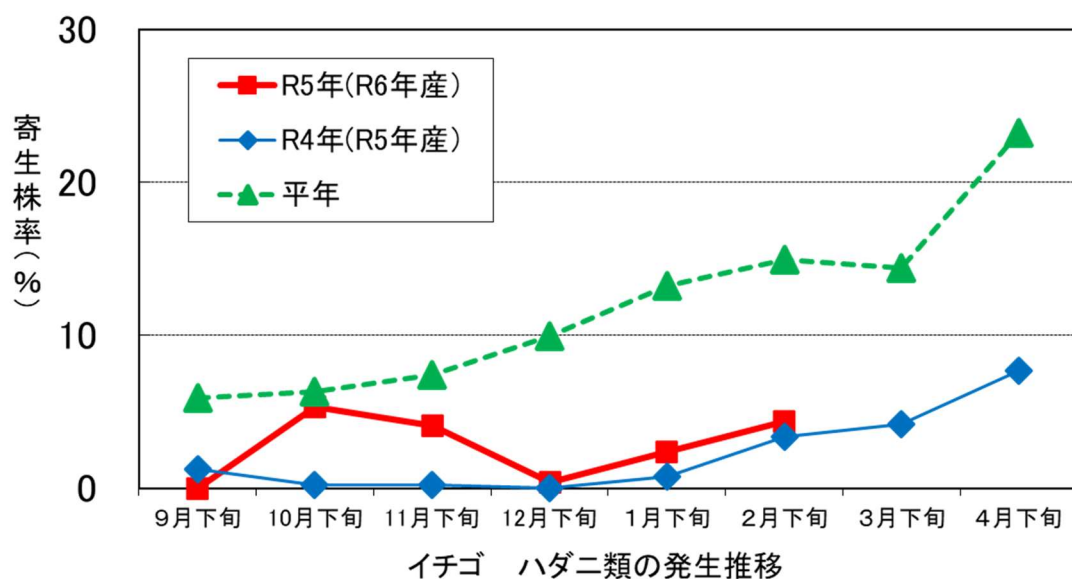
(ア) 天敵に影響の少ない薬剤(マイトコーネ剤、ダニコング剤、スターマイト剤等)を使用する。

(イ) 硫黄のくん煙は1日2時間程度とする。

※ 放飼方法、放飼後の管理についてはメーカーホームページを参照

オ 薬剤散布を行う場合は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。

(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/123673.pdf>)



5 アザミウマ類

令和6年2月1日付け令和5年度農作物病虫害発生予察技術資料第2号参照

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/171123.pdf>

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	平年並	少	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率50.0%(平年22.0%)、寄生花率2.2%(平年2.1%)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、3月の気温は平年並か高い(+)

(3) 防除対策

<防除判断>

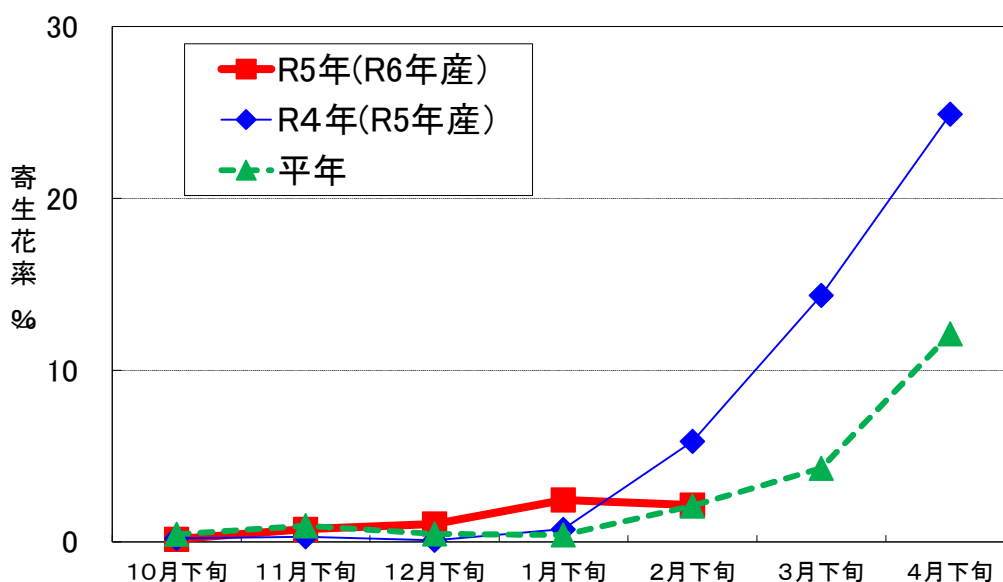
気温が高くなると施設外からの侵入が増加し、施設内でも急激に増殖するため、こまめには場を見回り、寄生花率が10%を超えている場合には、直ちに薬剤を散布する。

<防除のポイント>

ア 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。化学農薬に対する抵抗性が発達しているため、散布後に効果を確認し、十分な効果が認められない場合は、他系統の剤に変更し、再度防除する。

イ 薬剤散布を行う場合は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。

(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/123673.pdf>)



イチゴ アザミウマ類の発生推移

【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想 発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
イチゴ	菌核病	平年並	平年並	前年並	0	0.5	発病茎葉、発病果は除去する。
	コナジラミ類	やや少	少	少	10.0	24.8	

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 病虫害発生時期の基準（原則として過去10年間の発生時期と比較）

早 い	過去10年間の平均値より6日以上早い
遅 い	〃 より6日以上遅い
やや早い	〃 より3～5日早い
やや遅い	〃 より3～5日遅い
平年並	〃 を中心として前後2日以内

注：ウンカ類は1971年以降、コブノメイガは1985年以降の初確認日と比較（半旬毎）

(3) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1 か月気象予報（2月29日福岡管区気象台発表）

予 報	低 い (%) 少 ない	平年並 (%)	高 い (%) 多 い
気 温	20	40	40
降 水 量	30	30	40
日照時間	40	30	30

週ごとの気温傾向

予 報	低 い (%)	平年並 (%)	高 い (%)
1 週 目	30	50	20
2 週 目	20	40	40
3～4 週 目	20	40	40